

〈書評〉伊勢田哲治『動物からの倫理学入門』 名古屋大学出版会、2008年

江口聡

『倫理学研究』原稿

草稿段階でのもの。『倫理学研究』では1、2節をカットしている。また誤字脱字だらけであることをおわびする。

1 倫理学の入門書・教科書がなかった

十数年前、非常勤講師として初めて大学一般教養の授業を担当することになったときに、国内には倫理学の定番の教科書といったものが存在しないことに気づいた。大学1、2回生に読ませるため、基本的な倫理学説を平明な記述で紹介したテキストが欲しかったのだが、私が知っている概説書の多くは、一般向けというよりは研究者予備軍たちに向けたものであって、まだ倫理学に十分な関心を持っていない学生に読ませることは無理に思えた。諸先輩にアドバイスを求めても、はかばかしい答を得ることはなかった。大学の授業内容は「営業秘密」で、簡単に後進に教えるものではなかったのかもしれない^{*1}。このようなことは、一般教養向け哲学・倫理学の講義を担当したことのある人々には共通の経験だろう^{*2}。

それでは我々自身はどんな入門書を読んで研究者を目指したのだろうか。正直なところ怠惰な学生・院生生活を送ってきた私は、当時の学生がどんなテキストによって倫理学を学んだのかのサンプルとしては不適切かもしれない。だがともかく、当時の大学の雰囲気は、どの大学でも、とにかく過去の偉大な哲学者——デカルト、ヒューム、カント、ヘーゲル、キェルケゴールなど——を直接に——原書で——読むべし、というものだったのではないだろうか。

いくぶん現代的な倫理学といえば現象学系統のものか「ポストモダン」ということになり、当時の私は、ロールズやノージックたちの功利主義批判の議論はおろか、功利主義が正確にはどんなものであるかもよく知らず、単なる英米の浅薄な思想であると漠然と思いこんでいた。道徳判断には客観的な基準があるのか、なんの基準もない単なる主観の表明に過ぎないのか、そのどちらでもないのか、といったメタ倫理的な問題をはっきり問題として考えることもできなかった。あきらかに、私にはカントやキェルケゴールを読む前に倫理学のよい入門書、それもなるべく客観的で平明な入門書が必要だった。しかし何を読めばよかったのだろうか。

私が倫理学がどんな学問であるかについてのそれなりの印象を形成しはじめたのは、博士課程に進み、トマス・ビーチャムの *Philosophical Ethics*^{*3} といった英米の標準的なテキストに目を通し、翻訳でフランケナの

^{*1} 「FD」などに刺激されてか数年前に哲学教育についてけっこうな議論がなされたが、どれも抽象的で、具体的にどんなテキストでどんな方法で何を教えるか、といったことは議論されなかったように見える。

^{*2} のちに触れるレイチェルズ『現実を見つめる道徳哲学』の訳者たちも同様の不満をもらしている。

^{*3} 紙面の都合上、文献情報を省いてあるが、どれも有名な書籍でありネット等で簡単に検索できるはずである。

『倫理学』を読み、さらにバーナード・ウィリアムズの *Ethics* やフィリッパ・フット編の *Theories of Ethics* のような各種のリーディングスやアンソロジーで重要とされる文献を読んでからのことである。それまでの倫理学についての知識はまったく断片的なままであった*4。私の怠惰と勉強不足、調査不足がなにより責められるべきだが、英米系の倫理学の手頃な入門書が手に入りやすい形で提供されていなかったことにも一因があるように思われる。

2 倫理学の教育と学問としての倫理学

倫理学の読みやすい入門書、あるいは大学教養教育用の適切な教科書がないという状況は、国内での倫理学研究・教育のあり方を反省すべき理由になる。

第一に、大学での教育を十分効果的に行なうことができない。近年は学生の知識量の低下が指摘され*5、大学での教育の質の向上が要求されている。学生自身からも、授業に対する要求は高まっている。大学の授業といえば講壇の上から難解な議論（あるいはおもしろおかしい話）を聞かせ、日記なのか感想文なのかかわからないレポートを書かせてそれでよい、という時代はすでに遠く過ぎさった。漠然とした課題を与えれば、学生はウェブから漠然とコピーとペーストを繰り返すだけである。ただぼんやりと「考えさせる」だけでなく、教養レベルの学生にしっかりとした自習課題を与える必要があり、そのためには十分な情報量をもったテキストが必要に思われる。もちろんそれは一般の学生に読みやすいものでなければならないが、一方で十分豊かな内容のあるテキストを与えなければ、学生は大学で初めて学ぶ哲学や倫理学という学問に対する憧れや関心を失ってしまう。

第二に、標準的な教科書がないことは、単に講義で困るだけでなく、倫理学の学問としての地位が怪しいことを意味している。大学で講義されるほとんどの学問には、ほぼ例外なく標準的な教科書がある。医学でも、物理学でも、心理学でも、誰もが知っている有名な教科書が複数存在しており、それは学界でそれまで広く認められている知識の蓄積を要約し、基本的な文献資料の提示し、現在の論争や集中的な研究の対象となっている問題を示唆する。たしかに「哲学」や「倫理学」は学問のなかでも特殊な分野であって、「標準」つといったものが成立しにくい領域かもしれない。それでもたとえば英米では良質の教科書が多く手に入り、それらは版を重ねることによって改良され、信頼を積み重ねてゆく。たとえばレイチェルズの *The Elements of Moral Philosophy* (邦訳『現実を見つめる道徳哲学』) はその典型で、すでに第5版となっている。

また、ロールズやノージック以降も英米の倫理学は大きな発展を見せ、研究者たちの関心も移り変っている。そのような発展と変化を教科書・入門書にとりこむことができなければ、ますます倫理学の学問としての地位が疑われることになるだろう。学問としての倫理学の地位を向上させるには、大学講義テキストや標準的なリファレンスとして利用できる良質の入門書が必要である。

第三は、より実践的な問題として、倫理学がなにか社会に貢献するとすれば、それは入門書を通してであろうということを指摘することができる。頻繁に指摘されるように、科学技術やグローバル化などの発展によって、倫理的問題への関心が高まっている。おそらくそうした問題は倫理学者が解決すべき問題ではなく、一般市民が議論し理解し解決に向けて取り組むべき問題である。そして、インターネットの普及によって、一般市民の間でも、各種の生命技術や情報技術、環境問題などの解決に向けて活発な議論が行なわれている。さまざまな論議がさまざまな場所で行なわれることは、たいへん望ましいことである。しかし国内のそう

*4 いまだにちゃんとしたイメージをもっているか心もとないが。

*5 私の学生時代より、特に学生の質や意欲が下がったということはないだろう。むしろ向上しているように思われる。

した議論の一部では、残念ながら、非常に素朴な主観主義や相対主義が主張され、倫理的問題については合理的な議論は不可能であるとされることがある。また各倫理学説（特に功利主義）が誤解された形で用いられ、結局のところは各人の道徳的直観が主張されるにすぎないこともしばしばであるように見える。また、権利や義務、責任、幸福、効用といった基本的な概念についての無理解も目につくこともある。おそらく倫理学者が応用倫理学的問題に貢献することができるのは、なにより道徳的判断がどのようなものであるのかを明らかにすることだろう。ネット掲示板やブログを読むならば、多くの人々がそのような道徳の本性についての考察を求めていることがわかる。しかし、倫理学者として「あの本を読めばとりあえず倫理学の現在がわかる」と自信をもって学生や一般読者に勧めることができる本がなかなか思いつかないのは倫理学にとりくむ者として無念なことだった。

3 これまでの入門書・教科書

ここで、ここ 20 年程度で、英米系の倫理学の入門書・概説書としてよく読まれたと思われるものをざっと見てよう。フランケナの『倫理学』（改訂版、翻訳 1975、以下同）は非常にシンプルで、哲学者たちの名前を出すことなく問題そのものを取りあつた理想的な倫理学教科書だった。他にユーイングの『倫理学』（1977）やラファエルの『道徳哲学』（1984）などが標準的な倫理学入門といえたと思われる。これらは基本的に英米の主流理論としての功利主義と、その批判を中心に組み立てられており、80 年代以降の国内の功利主義理解を形成したといえるのではないだろうか。マッキンタイアールの『西洋倫理学史』（1986）は、規範理論上の功利主義やメタ倫理学上の非認知主義といった当時の英米での主流に対して批判的な立場を前面に押し出したものだが、西洋の倫理学の流れをコンパクトに説明しており有益なものである。ノーマンの『道徳の哲学者たち』（1988、第 2 版 2001）は入門書というよりはすでに倫理学に専門的な興味をもっている学生・大学院生向けといるだろう。マッキーの『倫理学』（1990）は英米で非常によく読まれた優れた倫理学入門といえる。おそらくこれらが英米系の倫理学者による手に入りやすい入門書であったと思われる。しかしこうした翻訳によるものはどんなに工夫した訳文であっても翻訳くさをぬぐいさることができないのが教科書として利用する場合の難点である。

一方、国内の研究者による教科書あるいは入門書で最も有力なものは、「倫理学者」の代表として最も目覚ましい活動をした加藤尚武によるものだろう。加藤は上に上げたマッキーの翻訳に続いて、『現代倫理学入門』（1993）、『応用倫理学のすすめ』（1994）、『現代を読み解く倫理学』（1996）、『現代倫理学入門』（1997、『倫理学基礎』の改訂）、『応用倫理学入門』（2001）他、数多くの一般向け書籍を執筆し、倫理学という学問の概略と、特に生命・環境倫理学に対する一般の関心を獲得することに成功した。これらの著作で示された社会や科学についての幅広い知識からの興味深い議論と問題意識は、当時の倫理学の入門書として最も進んでいた。特に『現代倫理学入門』は、J. S. ミルの自由主義を 20 世紀の中心的理論として真剣にとらえ、その限界を明らかにすることが英米の倫理学の中心的課題であるという立場から広範な法哲学・政治哲学の問題を紹介しており、一般読者にも研究者にも非常に有益である。文章もこなれていて非常に読みやすい。ただし加藤の入門書の難点として、一般読者のためにしばしば理論や立場を大胆に簡略化してしまったことがあげられる。わかりやすくするためにあえておおざっぱにした推論と結論が、誤解をまねく可能性があるように思われた。加藤は『現代倫理学入門』の「あとがき」で、さらに充実でコンパクトな教科書となるように改訂を続けるという決意を述べていたのだが、残念ながら現在のところ実現されていないようである。英米での有力な入門書が何度も版を改め改良されていくことが通例であることを鑑みれば非常に残念である。

90 年代の国内の倫理学入門書でよく読まれたもう一冊は、川本隆史の『現代倫理学の冒険』（1995）であろ

う。本書はロールズを中心とした記述によって、国内での功利主義批判の骨組を作ったと評価することができるはずである。倫理学史を扱ったものとしては、訓覇嘩雄・有福孝岳編『倫理学とはなにか』(1981)、小熊勢記・川島秀一・深谷昭三編『西洋倫理思想の形成』(1985)ほか優れた研究論文集が存在するが、これらはどれもすでに倫理に興味をもっている研究者予備軍、あるいは研究者に向けたものといわなければならないように思われる。他に、昭和堂の「叢書《エチカ》」ナカニシヤ出版の「倫理学のフロンティア」、世界思想社の「学ぶ人のために」叢書・シリーズや有福孝岳(編)『エチカとは何か』(1999)などで、数多くの研究者が独自の優れた研究を発表し、一般読者・研究者向けに有益な情報をもたらしてくれた。しかし、それらの個別の議論に先立って、もっとも基本的な倫理学の問題である主観主義、相対主義、客観主義といったメタ倫理学的問題、各種の社会契約説、功利主義、義務論、徳倫理学、ケアの倫理といった各規範理論がどのようなものかを一般読者に簡略に示すことができる書籍は多くなかったように思われる。

また、上のような大学でのテキストを目指した書籍の多くが、多数の著者による共著であったことも問題であった。共著はやはり散漫でまとまりが悪い印象をまぬがれない。実際、一人の著者による「倫理学入門」と言えるようなものは、上の加藤の一連のものを除けば、黒田亘『行為と規範』、永井均の『翔太と猫のインサイトの夏休み』(1995)、『〈子ども〉のための哲学』(1996)、『倫理とは何か』(2003)程度しか見あたらない。これらはどれも興味深い入門書ではあるが、著者たち独自の主張の色が非常に濃く、むしろ黒田や永井の哲学入門の趣きがあり、教養課程でのテキストとしては使いにくさがある。

私自身にとって教養課程で使いやすい倫理学理論の概説や枠組は、むしろいわゆる応用倫理学の概説書の一部に見つかった。ピーター・シンガーの『実践の倫理』(1991、新版1999)や『わたしたちはどう生きるべきか』(1995)は具体的で理解しやすい形で各種の倫理学理論が提示されている。加藤の多くの著作の成功によってはっきりしているように、やはりまずは具体的な倫理的問題をはっきり提示し、そこから哲学的な検討に向かうのが倫理学の入門書の王道に思われる。

幸いなことに、今世紀に入ってから、かなりよい入門書が出版されるようになってきている。特に新田孝彦の『入門講義 倫理学の視座』(2000)は、後半は新田の専門であるカント倫理学にかなり傾いている感があるものの、単独の著者によって書かれたよい入門書になっている。さきに上げたレイチェルズの The Element of Moral Philosophy の翻訳である『現実を見つめる道徳哲学』(2003)は非常に優れた入門書・教科書であって、この本の出版によって倫理学の教科書事情はかなり改善されたと感じられた*⁶。応用倫理においても、トム・ビーチャムらの『生命医学倫理』(1997)『企業倫理学 I』(2005)やデボラ・ジョンソンの『コンピュータ倫理』(2002)などの冒頭の数章はコンパクトな倫理学入門になっている。国内の著者によるものでは、赤林朗『入門・医療倫理 I』(2005)および同『入門・医療倫理 II』(2007)も医療倫理を扱いながら、倫理学一般の入門としても優れている。非常に優れた概説書になっている。坂井昭宏・柏葉武秀編『現代倫理学』(2007)も広範な話題をコンパクトにまとめた良書である。伊勢田の『動物からの倫理学入門』はこのような改善状況により大きな一歩を刻むものである。

4 理想の入門書・教科書

ところで、理想の倫理学入門書とはどのようなものだろうか。私の考える条件は以下のようになる。

(1) 主要な倫理学理論をなるべく公平に紹介してほしい。倫理の本性についての主観主義、文化相対主義、

*⁶ キムリッカの『現代政治理論』、藤原保信・飯島昇蔵編『西洋政治思想史』、中山竜一『二十世紀の法思想』など法哲学・政治哲学でもよい入門書は多い。

客観主義など、そして規範理論としての利己主義、社会契約説、カント主義、功利主義、徳倫理学などを含む必要があるだろう。法哲学者や政治哲学者と区別される場合の倫理学者に特に期待されるのは、倫理的な判断とはそもそもどういうものなのか、その正当化の基準はなにかといったメタ倫理的題材だろう。

(2) できる限り倫理学理論と具体的な道徳的・社会的問題との関係を説明し、読者の関心をひきつけてほしい。私にとって倫理学が哲学のなかでも最高に魅力的なのは、それがわれわれの生活と密接に結びついているからである。ニュートリノがどういう意味で世界に実在しているか、将来ロボットが意識を持つことになるかなど問題は、たしかに興味深い問題ではある。しかしそれは、私が鯨ベーコンを食べようとする時にそれを非難しようとする人々がいるかもしれないこと、今日ラーメンを食べるために豚や鶏に猛烈な苦しみを与えており、そのため道徳的であろうとするならばラーメンを食べることを控えるべきかもしれないという問題ほど私の興味をひくものではない。倫理学理論が必要になるのは、なによりも個人や社会の行動方針を決定しなければならないときであり、そうした関心をうながすために具体的な問題を提示することが必要に思われる。

(3) 社会的事実・科学的事実に関するまずまず詳細なデータを含んだものであってほしい。抽象的な事例、仮想的な事例は我々の思考や想像力に訴えかける力が弱い。最近の大学生はさまざまな知識に欠けると指摘されることも多い。そのような学生に対しては、まずは現代社会にはさまざまな社会的問題・道徳的問題が満ちていることを示す必要がある。私がシンガーの『実践の倫理』がよい大学教養レベルの「倫理学」のテキストであると判断して頻繁に用いたのは、まさに現実の世界にはそうした重大で緊急な倫理的問題が多数存在しており、哲学や倫理学が少しは解決へ向けての力になりうることを示しているからである。

(4) 表現はできるかぎり平明であってほしい。もちろん哲学的な検討を行なう以上、さまざまな専門用語を次々と定義して使っていかなければならないだろうが、文章表現そのものは平易でなければならない。大学のテキストとして使用する場合、残念ながらおそらく翻訳は望ましくないように思われる。どんなに工夫した訳であってもどうしても外国語的なクセのある文章になってしまい、学生が理解しにくいことがあるだけでなく、レポート作成その他のお手本としにくいからである。事例の登場人物がトムやジュディなのは奇妙だし、応用倫理学的問題を提示する際には、データは国内のものであってほしい。また、複数筆者による共著はやむをえないが、できれば一人の著者による方が統一性の点で優れたものになるだろうことことは言うまでもない。

5 『動物からの倫理学入門』の特徴

さて、遠まわりをしたが、右のような基準から見た場合、『動物からの倫理学入門』は倫理学の入門書・教科書として望まれる性質をほとんどすべて備えているのである。本書は動物に対する道徳的配慮の要求の運動というわれわれが考慮せざるをえない具体的問題を軸にして、現代英米系倫理学のトピックの多くを網羅的に紹介している。論理と表現は明快であり、また動物の利用や飼育についての事実情報も多く含んでいる。

簡単に本書の構成を述べておく。序章で倫理学の課題が価値判断を分析する学問であることを指摘し、相対主義を簡単に反駁する。「第I部基礎編」では動物愛護・動物解放運動の歴史を簡単に見たあとに、それらの運動の背景には功利主義と義務論という倫理学の主流の枠組があることを指摘し、規範理論としていずれを採用するにしても、人間に適用しなければならないと思われている道徳的原則を動物に適用しないという立場をとることが困難であることが示される。第二章では、メタ倫理学、第三章では社会契約説、第四章では進化生物学および進化心理学を紹介しつつ、人間を道徳的に特別扱いすることが困難であることが語られる。第四章でゲーム理論と進化学による道徳の基礎づけや起源論という最近注目されているプロジェクトが入門書としてはかなり詳細に議論されていることは注目されるべきである。ここまでの「基本編」で大学教養課程での倫理学入門としてはほぼ十分といえる内容を含んでいる。

「第 II 部発展編」はさらに野心的な内容となっている。第五章では、ほぼすべての道徳理論が扱わねばならない「なにをもって福利とみなすか」を巡っての議論が、動物実験という具体的問題を通して議論される。快樂説、選好充足説、ロールズやセン、ナスボームそれぞれの客観説を紹介し、それぞれの難点が検討される。第六章では工場畜産や菜食の問題を扱いつつ、功利計算にまつわる各種の難問の紹介である。平均説、総量説、先行存在説といった功利主義の解釈の違いが検討される。この章では英米においても倫理学者によって無視されがちな二十世紀の経済学の歴史と考え方も扱われていることは特記すべきであろう。最後に第七章では野生動物の保護の問題を通して、「ディープ」エコロジー思想、ケア倫理や徳倫理学が紹介される。

終章では非常に見通しのよい全体のまとめと、対立する理論を比較検討する基準がいくつか推奨され、さらに道徳理論と道徳的直観の改良手段として往復均衡法*7が提案される。文献案内と索引も非常に親切で有益である。

実際のところ、これほど盛りだくさんの内容を一冊の入門書にまとめた技量には感服する。全体を通して、対立する理論間の優劣をそれぞれつけたり、確固とした規範的判断を下すことは用心深く避けられている。伊勢田自身が認めるように、全体としてはメタ倫理学上の非認知主義および規範倫理学上の功利主義に好意的である。しかしそれぞれの難点も十分に検討され、また対立するそれぞれの立場の魅力も十分に説明されている。また穏健ではあるもののはっきりと動物が道徳的配慮の対象となることを認めている。しかし、その議論はおおむね公平なものになっている。このように本書は倫理学の入門書としてはほぼ理想的なものになっている。各理論の記述は正確で細かな配慮が筆者の深い理解をうかがわせる。

6 動物倫理と道徳の理由

一方、動物倫理を提唱する（はずの）入門書としては、かなり穏健な立場のものとなっている。全体を通して動物に対する「共感」や「愛情」といった我々の感情的側面は控え目に表現されているおり、動物解放論に対する批判が十分に検討されている。また動物の現状の苦痛などについても動物愛護団体などの主張ほど扇情的な表現は控えられている。動物解放の問題の検討が往々にして扇情的なものになってしまうことを考えあわせれば、これらのことは長所だろう。読者は巻末にあげられている文献や DVD、ネット上の情報などをたよりに各種の文献を調査して、動物実験や工場畜産の現実の深刻な状況と問題をより明確に把握することができるだろう。

さて、すでに動物に対してなんらかのシンパシーを感じている人々は、おそらく、人間に対して道徳的であるべきであるならば他の動物に対しても道徳的であらねばならないはずである、ということ認めることだろう。むしろそのような人にとっての関心は、むしろ、私たちは「どの程度」動物に対して道徳的であらねばならないのか、ということかもしれない。一方で、反感を抱いて動物倫理に関心をもつ人もいるだろう。このようなひとびとは動物に対する道徳的義務といったものを主張する（異常な？）人々の議論がどの程度耳を傾けるに値するものか確かめたいと思っているだろう。このような人々も、我々の動物に対する義務がどれほどのものなのかを知りたいと思うだろう。

伊勢田が見るところ、有効な動物解放論の構造は次のようになっている。

- (1) われわれがすでに人間に対してあてはめている道徳的な規則（功利主義や危害原理）をよく検討する。

*7 通常は「反省的均衡」や「反照的均衡」とされるロールズらの術語である。他にも「定言命法」を「無条件の命令」と表現するなど、平明で理解しやすい用語を採用する方針は賛同できる。

(2) それらの規則の適用対象を人間に限る理由はその規則そのものの中にはないと主張する（つまりそういう限定は種差別に他ならないと主張する）。

(3) それらの規則の内容から配慮の対象（有感生物か生の主体か）や内容（幸福の配慮か危害からの自由か）を決めていく。(p.47)

従来の倫理学の研究は、ほとんどの場合 (1) について行なわれている。動物解放論が興味深いのは、そうした議論は、(1) の研究の結果発見される道徳判断の規則は、人間というグループを超えて動物にまで適用されると主張するからである。大きなステップは (2) である。もし人間に対して適用している規則を動物にも適用しなければならないのなら、その規則にしたがって (3) の内容を決定することも認められるからである。

しかしここで疑問が生じるはずである。第一に、我々が人間にあてはめている道徳の規則は、実際にこのように動物にまで拡張されるものなのか。より正確に表現すれば、動物にまで拡張されるべきものなのかどうか。第二に、もし普遍化可能性の要求が十分に強力で、動物にまで拡張されねばならないと考えられるとしても、それならばそのような普遍化可能性の要求に答えるべきなのか、あるいはより端的には、そのような「道徳」に我々（私）が従うべき理由があるのかどうかである。

第一の問いに対する伊勢田の議論は、基本的には道徳判断に対する普遍化可能性の要請から導かれる。我々の判断が自分勝手なものではなく、道徳的なものであるためには、同じような状況に対しては同じような判断をくださねばならない。しかし、この普遍化可能性の要請はそれほど強い制約にはならない。たとえば、「言葉を話せない人間の赤ちゃんは食べてはいけないが、言葉を話せない動物は好き勝手に食べてもよい」という判断は、「もし私が言葉を話せない動物ならば私を好き勝手に食べてもよい」を認める準備がありさえすれば普遍化可能な判断として下していることになる (p. 87)。実は、「B 型の人間はいじめてよい」のような一見自分勝手に恣意的に思われる判断も、「自分が B 型であればいじめられてもかまわない」と認める準備があるならば普遍化可能な判断なのである。

そこで伊勢田は、「ちゃんとした理由のない差別はしてはならない」(p. 88) のような前提を導入する。これはわれわれが人間の内部での差別を禁じるときに用いる要求であり、これ自体普遍化可能である。伊勢田は、上のような血液型による差別はたいていの人々が認めないような「ちゃんとしていない」理由なのであり、動物を差別するために一般に用いられる理由も同じようにちゃんとしていないものであると主張できると考える。

人間はみな道徳的配慮の対象になり、動物はそうではないと主張するためには、その「ちゃんとした」理由として、人間と動物の間の（能力などについての事実的な）違いに言及する必要がある。たとえば、高度な知性をもたない存在、あるいは言葉を用いることのできない存在は道徳的配慮の対象にならない、などと主張されることになる。

さて、人間と動物の間に一線を引こうとすれば、認知の能力や契約の能力などの違いに訴えざるをえない。単に遺伝的な違いなどに訴えることを安易に認めてしまえば、上のような血液型による差別をも認めざるをえなくなるのがミソである。人間は平等でありみな人権^{*8}をもつとされるとき、その「皆」には赤ん坊や老人や植物状態の人などの「限界事例」、すなわちなんらかの意味で例外的な存在が含まれている。もし動物を道徳的配慮の対象からはずすために認知の能力などをもちだせば、限界事例にあてはまる人々をも道徳的配慮の対象からはずしてしまうことになる。われわれの多くは限界事例とされるひとびに対してそのような態度をとりたくはない。したがって、論理的首尾一貫性を重んじるのであれば、動物をも配慮の対象にしなければならない。

*8 全体として細かいところまで配慮のゆきとどいた論述にもかかわらず、本書では「人権」という語を不用意に「道徳的配慮を受けられる権利」の意味で用いている箇所があるのは残念である。

しかしこうなると、なぜ、現にわれわれが日常的に従っている身内や人間だけををえこひいきする道徳ではなく、動物までも配慮するような道徳にしたがう必要があるのか、という問題が生じる。あるいはなぜ道徳判断の普遍化可能性と「ちゃんとした理由」の要請に答える必要があるのか。

この点で私が特に興味深く読んだのは、「倫理なんてしょせん作りごとなのか」と題して「なぜ道徳的であるべきか」という倫理学の根本問題の一つを扱った第四章である。伊勢田はこの問いに対する答として、ホプズ社の社会契約説、進化論（心理学）による道徳の起源についての推測、ヒュームらの道徳感情論、ゴーチエらのゲーム理論にもとづく契約説などを検討して、どれもあらゆる人にとって道徳の理由を与えるには不十分であると結論している（p. 176）。進化心理学や道徳感情論はなぜわれわれが道徳的であるかの説明にすぎず、道徳的ではないひとに道徳的であることを求める理論ではない。これらの説明はむしろわれわれの身内びいきの傾向をも十分うまく説明してしまう。また、ホプズやゴーチエらのラインの議論は、利己的で合理的な人間に「道徳的」であることを求めるものかもしれないが、それは他の人々からのサンクションや協働による利益が十分に存在しなければ効力をもたず、われわれに比べて非力な動物までには拡張できないかもしれない。

動物解放論の代表者の一人であるシンガーのようなタイプの論者はここで、あらゆる人に道徳の理由を与えることをほぼあきらめ、結局のところ、たいていの人にとって（あるいは、私にとって）動物に対して道徳的な配慮を行なうことが、そのひと（私）にとって十分な理由があればよいと考え、そうした道徳的な生活がわれわれに「自己実現」「生きがい」「生きる意味」などを与えると示唆するわけだが、伊勢田はこの道はとらないように見える。176 ページでは道徳の理由については徳倫理学などを論じた後に再度議論することが予告されているが、実質的な議論を行なっているところを見つけることはできなかったのは残念である。したがって私はいまだに人間に対して私が認めている権利ほど大きな権利を動物に対して認めるべきであるという点に納得してはいない*9。

ともあれ、こうした現代英米系倫理学のよい入門書が出版されたのは喜ばしいことである。最近活発な国内での功利主義とその周辺について規範的議論の水準が大幅に上がることが期待できる。特に大学院生など若い世代にはぜひ詳細に検討してほしい。一方で、このような水準の大陸系の倫理学の見取り図も欲しくなる。先に上げた加藤尚武は「ドイツ、フランスの倫理学は、英米の倫理学に後れを見せないように体裁を取り繕っているという状況である」と揶揄していたが、どうだろうか。大陸系倫理学の反撃（？）も期待したい。さらに、現代倫理学の重要論文等のアンソロジーが手に入りやすい形になり、国内での倫理学をめぐる研究がアカデミックで正統的な形で盛んになることを期待する。

*9 ただし、倫理学の教師としての私が動物解放論に賛成しているフリをする十分な理由をもっていることについてはまったく疑いを抱いていない。そうすることで私は論理的に整合的で感受性がある倫理学研究者であることを他の人々にアピールすることができ、それは私にまわりまわって大きな利益をもたらすと思われる。そしてそういう「フリ」を十分に上手に行ない、影で仔牛肉のステーキを味わうほどの用心深さをもちあわせていないので、実際に動物の権利を認めてしまった方がよいことも理解しているつもりである。